

あそ

12

2007





山を抜く力も折れて松の雪

大高子葉（源五）

（佐藤喜孝蔵）

あを

十二月



箸

秋の蝶抓めばかさといひにけり
草の上歩いてをりぬ秋の蝶
箸を持ちあつまる春の象の前
箸をとり置くまで秋の科かな
このわたにちよつとよごせる箸のさき

東京 佐藤喜孝

かりがねや波頭無限の九十九里
冬ざれや外れ馬券を手放さず
航跡を道標として百合鷗
しろがねの袋田の滝紅葉晴
神無月貼紙にある迷ひ犬

東京 遠藤 実

走り蕎麦宿の主がごゆるりと
栗名月健やかな老い集ひけり
十三夜後ろから来るフランス語
月天心白紙のままの句帳閉づ
吟行や膝の上にて秋を生む

神奈川

鎌倉喜久恵

秋草の文字にひゞきにいやされて
秋の草あるだけ籠にざつくりと
たまはりし喜寿の齢や菊日和
十三夜身辺音もなく更けて
秋台風韋駄天のやう通り抜け

神奈川

木村茂登子

永年勤続毛玉の浮きしカーデイガン
胎動に大輪の笑み赤とんぼ
川で猫何かくはへて秋暑し
さはやかや空也の杖に鹿の角
片ひざを立て清盛像昼の虫

東京 篠田純子

無花果の枝の廣がる路地の奥
辨当に添へる箸置もみぢの葉
物思ふことより覺めて鱒雲
搔き分けて銀杏拾ふ箸の先
ゆっくりと鉛筆削る秋燈下

東京 芝 尚子

東京 芝宮須磨子

菜箸を巧みに使ひ菊膾
花屋から秋の七草友の名と
秋高し腕に覚へのをりがみ展
秋の雨晴間を過ぎる小鳥二羽
暑かりし行く手を染める大西日

稔り田やさびしきものら群れをなす
蓑虫の屈託蓑を揺らしけり
恋知らぬ乙女に榎檀歪つなり
貫之はへたな歌よみ糸瓜かな
校長先生机上に榎檀長く置く

石川 定梶じょう

雄物川渡しの跡に野紺菊
きりたんぽ姉妹和やか秋田弁
峡粧ふあきたこまちの焼き握り
錦秋の秋田道より帰りなん
まほろばの払田柵跡刈田晴

埼玉 須賀敏子

山頂はガスかかり来る草紅葉
落葉松のさわさわと黄落す
父の好みし野茨の実は盛りなり
りんごの木枝はりんごを持て余し
途切れずにつづく山道草の花

東京 鈴木多枝子

黙々と御山へ向かふ台風裡
足が地を離るゴンドラ薄紅葉
吸口に青柚の浮かみ七回忌
霧のなか猿舎の辺り過ぎにけり
山下りる濃霧にひとりづつ消えて
秋前々月号正誤あかね 閘門管理室無人

秋 天

門前の石段に罅秋の風
転任の教師も居りし秋祭
海に足垂れ秋天の星の数
屋久杉の箸かるやかや新豆腐
花野きし一筋道の森へ入る

埼玉 竹内弘子

東京 田中藤穂

石燈籠揺す振りてをり萩の風
名残惜し荔枝の苦み茗荷の香
歩にあはせ謡の稽古花八ツ手
銀座秋へり旋回す火事騒動
秋茶会三人美しくなりにゆく

東京 東 亜 未

蠟燭のほのめく虚空夜長かな
所作事の伸びやかにして夜ながし
コンビニ夜長気働きよき娘をり
夜ながしジャズの流れる赤提灯
点となり遠のく鳶秋の空

三 重 長崎桂子

爽やかに故里の人皆親し
山瑪珥湖山莊にて国の空を低くす星月夜
山国や星美しき虫時雨
天の川横たふ空や目のあたり
秋晴の天池の水やエメラルド

愛知 西本春水

秋の風水輪をひろげ鯉の群
うす紅葉見ゆる硝子戸抹茶席
パトカーの音遠くあり十三夜
植木屋の帰りて鶉の声透る
決断のつかぬことあり金木犀

埼玉 早崎泰江

さくら紅葉耳のうらから眠くなる
短日を追ひかけてゆく消防車
今日寒くあしたあさつてあたたかし
過ぎし日は忘れて居らずシクラメン
数へ日や眠れない夜のくすりゆび

東京 堀内一郎

秋

束の間の秋を探しに佐久平
きつつきの音リズムカル風ゆらす
秋色や森のカフェの堅き椅子
秋晴や犬と一緒にカフェテラス
十二胡の音色かそけき後の月

東京 森山のりこ

かはりだま歌舞伎役者の面長し
やはやはと虫の這ひ出づ栗毬毬
野紺菊軋む水車の細水路
深呼吸小菊あふるる四ツ目垣
脚線美日に晒しをりきりぎりす

東京 森 理和

コスモスや珈琲豆と陶器の店
コスモスや心の澄みし日となりぬ
輪郭を描きしまゝの画架の薔薇
輪読に眼鏡拭きをり秋の昼
何処からかけふも訪ひくる秋の蝶

埼玉 山莊慶子

祭山車車軌らせ町をねる
水まきのババに手を振る登園児
実南天父母ねむる菩提寺に
庭手入こな所に毒茸
夕月夜昭和の歌にゆつたりと

東京 吉成美代子

ぬくもりへぬすみ入りたるぬのこづち
身ほとりの猫の寝息や秋の夜
少年の鏡に笑みし十三夜
秋の雨遠退く鴉の羽音かな
天出でて土になりたる秋の雨

東京 吉弘恭子

拭きても汗一茶の柱にわが指紋
コスモスのさざめく笑ひ風一揆
全身が秋風の的となり老ゆる
遠鴉に水ひろびろと照りわたる
旅果ての噴井に歪む顔ごと飲む

埼玉 渡邊友七

そこここに覗く苦瓜しやくれ顔
曾遊の地にて確かむ檀の実
山粧ひ淡く染めらる白き雲
湯沢駅稲架と案山子のお出迎へ
今だけのやはらかさとて真菰茸

東京 赤座典子

喜寿となりあれもこれも秋思かな
点と点斜めに結ぶ秋の旅
秋の闇鬱なる魔ものしのび来る
検診せずその時はその時と時雨
火が造る偶然秋の作陶展

東京 安部里子



曼珠沙華よゝゝゝゝとちゞみけり
南瓜煮て一人の昼餉烏龍茶
錠剤を数へ今年も冬となる
秋茜クキクキととび高上り
七草の数に入らねど吾亦紅
通院を姑と楽しむ金木犀
秋の水収まってゆくヒステリー
仕合せのかけらまとめる夜の秋
唱名があこの世この世を秋彼岸
棒ぐひのささくれあたま秋まつり
瀬戸の海雑魚釣りあげて天高し
ひぐらしの白馬安曇野鳴き通す
いま生れし蟬と神社の森にゐる

佐藤喜孝
安部里子
遠藤実
鎌倉喜久恵
木村茂登子
斉藤裕子
篠田純子
芝尚子
芝宮須磨子
定梶じょう
須賀敏子
鈴木多枝子
竹内弘子



前月作品

直立の向日葵の大いなる暗さ
秋祭法被も囃も嫌ひな子
月見寺木曾三川を眼下にす
張翰の恋ひし鱸や夢の中
秋暑し身をもてあますperlシャ猫
みち二つどつちにしよう返り花
後戻り出来ぬ畦道曼珠沙華
一匹の虫に呼ばれてをるやうな
どこまでも真つ直ぐな道大夕焼
太秦に鞍馬天狗や秋の風
大仏の胎内蟬の声満てり
数珠玉や一瞬浮ぶ幼顔

田中藤穂

東 亜 未

長崎桂子

西本春水

早崎泰江

堀内 一 郎

森山のりこ

森 理 和

吉成美代子

吉弘恭子

渡邊友七

赤座典子

喜孝抄



十・十一月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

くらげにも火急のときやかしぎをり 佐藤喜孝

半透明の寒天質で、傘をひろげたり閉じたりして水面を漂っていて日本近海に二百種類もいるという。触手に毒をもつ電気くらげは、土用波の立つころ湘南の辺りに出没する。干して中華料理や酢の物に使う。

ある事典に「海中に浮かぶ下等動物」とあるが、物の本にも「水母」「海月」と歴とした名をもつ腔腸動物である。

目鼻も定かならぬ、得体の知れないところに俳味を感じられたのだと思う。のんきそうに浮かんでいる「くらげ」にオーバーとも思える「火急」の措辞がみごとに決まり、おかしみが生れた。

八朔や阿久悠硬派全うす 赤座典子

作者はふっくらしっとりとした美声の持主で、歌の上手な方です。

先ごろ惜しまれつつ亡くなった「阿久悠」氏の作詞になる楽曲がお好きだったのだと思う。筆者も、ふと口をついて出てくる歌が、阿久悠だったということが何度もある。阿久悠は「悪友」の振りだそうです。氏が己の信ずる道をつらぬいたことが「硬派」といえばいえると思います。

齋を受く棚経僧の衿あをし 鎌倉喜久恵

「精進潔齋」といって、神事や法会などの前に酒や肉食などをつつしみ、沐浴などして心身をきよめること。「棚経僧」は、お盆に檀那寺の小僧として各家の精霊棚の前でお経を読んで歩く年少の僧。「衿あをし」が若い僧らしくていい。

吸ふ息の詰まってふ炎暑かな 篠田純子

日本は、四季のある温暖な気候のはずだったのに、年を追うごとに夏の暑さが長く耐え難くなってきている。

石油や石炭を燃やし過ぎて二酸化炭素が増え、地上が温暖化しているのだそうだ。真昼の石畳の照り返しは熱気そのものだ。涼をもとめて冷房の建物に入れば、さかんに二酸化炭素を排出しているというジレンマである。

さるすべり紅の一樹となりけり

芝 尚子

その名の通り皮を剥いたようなすべすべした木肌、紅色の濃い「さるすべり」の盛りは実にうつくしい。紅色の薄紙を抓んだような花びらが散る容子もいい。

おしんこにお茶漬今日はパリ祭で

定梶じょう

七月十四日、一七九八年のこの日パリ市民が、専制政治の象徴だったバスチーユ監獄を焼き打ちし、史上に名高い「フランス革命」の端緒となった。「巴里祭」はルネ・クレールの映画に因んだ邦訳名。日本だけの呼称。

各地で農民の暴動が起り、民衆は王宮を襲撃し、ルイ16世と妃のマリー・アントワネットは処刑される。奢侈を尽した宮廷生活に対するに「おしんこにお茶漬」が面白い。

払曉を待つてみんなん鳴き始め

須賀敏子

熊蟬について大型。夜のうちに穴から這い出て木に上り、明けがたを待つていたかのような力強く鳴き出す。

俳句で「蝸」と「法師蟬」を秋期としているのは、鳴き声の感じが秋らしくさわやかであるためだそうです。

熊蟬やみんみのほうが秋が深まるころまで鳴くそうです。

蕎麦食へて祭の町を後にせり

田中藤穂

長野県辺りを旅していると、「蕎麦」を食べることが多くなる。種物なしがいい。何処のお祭だかわからないのもいい。俳味多し

糠床の茄子あざやかにのこりけり

早崎泰江

明礬を入れると（入れなくとも）「糠床」から漬けた「茄子」を取り出すと、きれいな茄子紺のあとが残る。ほどよく漬けられた皮の柔らかい色のあざやかな茄子は千金の味である。

やかなけり使はずと決めつつれさせ

堀内 一郎

「やかなけり」。「や」「かな」「けり」このほか十五あるといわれる切字のうち、最も使用頻度が高い三つの切字だ。一句を完結させるために言い切る形をとる語、そういうえば一言ある俳人は意識的に使わないようだ。

六十年余りの作句生活で斯道を上りつめた感のある作者が改めて言われる。傾聴すべし。

〈霜柱俳句は切字響きけり 石田波郷〉

むささびの大きく飛んで星月夜

吉成美代子

高尾山の頂上の薬王院に向かって上って行くと、三橋敏雄の「むささびや大きくなりし夜の山」の碑が左手に見える。むささびは重たそうな皮膜をひろげて意外に大きく飛ぶようだ。

てのひらの四角でありぬ新走

佐藤 喜孝

「じつと手を見る」と詠んだ歌人がいた。

「手」は「てのひら」であろう。その作品は文語体だ

が話し言葉にちかく分りやすいので長く愛誦された。

「てのひら」も「掌」も、語感から柔らかい包み込むような印象をもっていたので、「四角」は不意を衝かれたが言われればそう見える。人の未だ言わない言葉を平易に表し、とびきりの季語を配された。

無遠慮に枝を伸して萩の道

遠藤 実

庭木など刈り込みをしないと通までずんずん伸びる。

ことに「萩」のような小低木は夏頃から花をつけるので剪る期を逸してしまうと道をゆく人の妨げになる。「無遠慮」なのが「萩」のようでおもしろい。

烏瓜手にさげ山を降りて来る

鎌倉喜久恵

藪の中の枯れた蔓を引くと、濃い朱いろの「烏瓜」が繋がってついてくる。蔓は枯れても実はしっかりと付いて格好の家苞になる。たのしそうな作者の様子が見えるようだ。

根津の夜みこし見てゐる談志見る

篠田純子

一病は完治したのだろうか。人前の「談志」は意気軒昂である。下の娘から借りたヴィデオにやはり根津の商店街を、若い衆を連れて名代のお煎餅屋や佃煮屋に寄っているのを観た。読売ホールだったか、一席おわつて這うように楽屋に戻るところも映った。どこかに門構えの家があつて、常には根津のアパートに住んで居られるようだ。掲句、しゃべらない談志が居る。

戦争がうすく目をあげ曼珠沙華

芝 尚子

他の四句も起承転結のはつきりした完成度の高いものですが、掲句は「戦争」というテーマを「曼珠沙華」でどうまとめるか興味のあるところでした。「うすく目をあげ」状態が続いているのを気味悪く思い、避けて通りたい。事の本質を直視するのが恐いのです。

いちばん年嵩の尚子さんの気骨がうかがえる一句です。

別名、死人花、幽霊花・捨子花。鱗茎の澱粉は有毒ですが、晒せば救荒食物になるという。聞くだに恐ろしい曼珠沙華。

而してねむれる豚舎霧がつつむ

定梶じょう

弾力のあるピンク色のからだを寄せ合つて「豚舎」の豚が「ねむり」に就いたのでしょう。山ふところの感じですか。「而して」の前の様子を想像しました。叙情詩の一行のようです。

とろろ汁信、心うすく情の濃く

田中藤穂

以前、高尾山で仙人の杖のような自然薯を買つて、教えられた通り鬚根をこそげ落とし、皮ごと摺り下ろしたのがおいしかった。

私自身は「信、心うすく」「情」も濃くないほうだと思います。

けいたいを持たぬが誇り梨をむく

堀内一郎

乗物で、歩きながら、「けいたい」を見入っているのを苦々しく思っているのだと思えました。傍目には一郎氏の「誇」りであろうことも数えられますが、ご自身敢て斯う宣言したわけです。

後戻り出来ぬ畦道曼珠沙華

森山のりこ

人ひとりやつと通れる「畦道」は、回れ右をしても、後から来る人にぶつかって戻れない。水がなければ田圃に下りるほかありませんね。実体験の強みで良い句ができました。

一匹の虫に呼ばれてをるやうな

森 理和

喫茶店「傳」のまわりは北歐風の庭園で、さまざまの樹木、金魚や目高のあそぶ浅い水場がある。秋も終るころ「一匹の虫」が鳴いている。なぜか耳につく。「呼ばれてをるやうな」の感覚的な受け取りかたがいい。

太秦に鞍馬天狗や秋の風

吉弘恭子

「太秦」は京都の地名、映画の撮影所があるので有名。時代劇映画はみな此所で作られた。「鞍馬天狗」は大佛次郎の連作小説を映画化したもので、嵐寛寿郎の十八番だった。

映画が衰退してテレビの時代になっても、時代物といえば此所が使われ京都の観光名所の一つになっている。

「秋の風」がぴったり。

鯛雲一劃に墓地たまはりて

渡邊友七

ご自宅は「墓地」に隣接している閑静なお住居である。四十年余り経って周りに家が建ち並んでも、墓地の静けさは変わらない。自ずと「たまはり」の一語がでてくる。

「鯛雲」が歳月を感じさせる。

笑ひ声聞こえる写真水鉄砲

齊藤裕子

水鉄砲で戯れてゐる写真であらうか。どのやうな写真だか想像できるやうだ。閉ぢこめられた時空を慈しむ作品。(喜孝)

棒ぐひのささくれあたま秋まつり

定梶じょう

秋まつりのための棒杭であらうか。ささくれている棒杭の頭。毎年使用されてゐる杭のやうである。秋まつりを象徴するかのやうである。上手に説明できないのは残念だが「ささくれあたま」は垂涎に値する掌握。「まつり」を漢字ではなくひらがなでと、細かな配慮も的確である。(喜孝)

直立の向日葵の大いなる暗さ

田中藤穂

燦々たる太陽の下の明るい中で存在感のある向日葵。その向日葵が「大いなる暗さ」を内包してゐると見事把握した。太い一本脚の向日葵の今まで知られてゐない一面を知ることができた。(喜孝)

張翰の恋ひし鱸や夢の中

西本春水

箕小路から西本春水に俳号を変へてからの作品は少ない。今回、中国の郷里に帰られた折の作品を寄稿された。順次発表させていただく。「張翰」は晋書に張翰伝として識られた人物、ということを知った。

張翰は揚子江の南の松江という土地の出身。松江は西晋の本拠地の黄河流域とは遠く離れたところですが、彼のすぐれた才能を見込んだ西晋の大臣に請われて首都洛陽に赴任し、政府高官の地位に就きました。張翰はここで立派な業績を挙げましたが、首都として繁栄はしていても洛陽は内陸の地。海から遠く離れ乾燥した地域で、江南のように水に恵まれた土地ではあり

ません。

秋が訪れるたびに張翰は故郷・松江に思いを馳せました。そこで好んで食したご馳走は、蓴菜の羹と鱸魚の膾です。この二品の味わいはいつになっても忘れたことはなく、食べたい思いは年ごとに募るばかりでした。

「人生は自分の思うままに生きるのが本来ではなかろうか。故郷を遠く離れて身の栄達を図ってもそれが何になろう」

ついに張翰は高官の地位を捨てて故郷・松江に帰り、蓴菜の羹と鱸魚の膾をこよなく好んで食し、詩人となって生涯を送りました。

(「野菜の語部」さんのホームページから引用させていただきました。)

俳句は表面の意と秘めた意があるものがある。張翰のことを知ると、外国で暮されている春水さんの心境を重ねて読んでしまふ。春水さんも帰郷して鱸を食べられたのだらうか。一郎さんの「みち二つどつちにしやう返り花」も、一郎さんの生活を知るものには、同じやうに潜ませた大変なことがある俳句と読んでしまふ。(喜孝)

近世俳諧と漢詩文 2 式

王 岩

陳簡齋が水墨梅の題に、含章簷（簷）下のこゝろの自画に讚す

化粧する鏡の中や軒の梅

許 六

許六は森川氏。明暦二年（一六五〇）～正徳五年（一七一五）。蕉門十哲の一人である。別号に五老井・菊阿仏・無々居士などがある。絵画・漢詩を楽しんだが、三十歳前後より俳諧に傾くようになった。俳諧ははじめ季吟や常矩門に学び、やがて尚白・其角・嵐雪らの指導を受け蕉風に近づき、元禄五年、芭蕉に入門した。『和訓三体詩』（正徳四年）と『五老井発句集』がある。問題の句は『続有磯海』にある。『犬注解』には、次のように前書ナシの句形も見える。

化粧する鏡の中や梅の花 許六

下五「軒の梅」と「梅の花」は表記が少し異なる。

句前の「陳簡齋が水墨梅の題に、含章簷下のこゝろの自画に讚す」という前書は、『聯珠詩格』巻二十に

載る陳簡齋の七絶「墨梅」からの出典であろう。

含章簷下春風面、

含章簷下 春風の面

造化功成秋兔毫。

造化功成 秋兔の毫

意足不求顔色似、

意足れば 顔色の似ることを求めず

前身相馬九方臯。

前身 馬を相す九方臯

陳簡齋（一〇九〇〜一一三八）、字は去非。号は簡齋。洛陽（河南省）人。政和三年（一一二二）の進士。南宋になつてのち翰林学士、参知政事の官についた。『簡齋詩集』三十卷ある。

前書における「陳簡齋が水墨梅」及び「含章簷下」という文句から、『聯珠詩格』卷二十の「墨梅」詩を指すと思われるが、「陳簡齋が水墨梅」云々は、同じ『聯珠詩格』卷九と卷十八に見える陳簡齋の二首「水墨梅」の詩題を記憶違いしたか、或いは許六が囑目した版本の『聯珠詩格』には「水墨梅」と題してあるのかも知れない。水墨梅にしる、墨梅にしる、何れも水墨で描いた梅花のことを指しているから意味として大差はない。

『太平御覧』によると、南朝の宋武帝の娘である寿陽公主は梅花を好んだ。ある年、彼女が含章殿の軒の下で小春日を楽しみ、まどろんでいると、風が一輪の梅花を吹き落していった。五弁の梅花は彼女の額の上に落ち薄紅色の痕跡を残した。いくら払っても落せない。それを見た皇后は公主が益々美しく感じられて、

しばらく、それをそのままにしておくようにと勧めた。三日後、水で洗い落としたが、後に宮女たちはそれに倣って化粧を施すようになった。これを「梅花粧」と呼ぶ。

陳簡齋の七絶は、この故事を踏まえて水墨の梅花を詠んだものである。この水墨の梅花はその昔、含章殿の庇で憩う寿陽公主の美貌に対比するものだ。梅花の真の美しささえ表現できていれば、色彩が似ているかどうかなど問題ではない。起句の「春風面」は美貌を謂う。承句の「秋兔豪」とは秋豪とも言い、極めて微細なことの喩えである。結句の「九方臯」は、春秋時代の秦の人で、善く馬を相した。

絵画に優れた許六は前書で説明したように、陳簡齋の漢詩題を使って含章簷下の情景を彷彿させる絵画を描いた。恐らく寿陽公主を連想させる美人と梅花の構図であろう。その絵画に讃として題したのがこの句であった。

閨房で身支度する美人が向かう鏡の中に、軒の下で咲き匂う梅花が映っている。まさに「梅花粧」をほどこすところであろう。

因みに、貞門の政信という俳人もこの故事を踏まえて、「木の間もるや梅花の粧ひ月の貌」（『続山井』）という俳諧を詠んでいる。

以上、漢詩人の名前などを含む句題と受容した漢詩を記し、その漢詩を踏まえたうえで句を解説し鑑賞した。

もりかわきよとく
森川許六

うの花に芦毛の馬の夜明哉
麥跡の田植や遅き螢とき
はつ雪や先馬やから消そむる
禪門の革足袋おろす十夜哉
人先に医師の袷や衣更
一番にかゝしをこかす野分かなを
明方や城をとりまく鴨の声
蚊遣火の烟にそるゝほたるかな
婿入の門も過けり鉢たゝき
腸をさぐりて見れば納豆汁
十團子も小つぶになりぬ秋の風
大名の寐間にもねたる夜寒哉
茶の花の香や冬枯の興聖寺
清水の上から出たり春の月
涼風や青田の上の雲の影
菜の花の中に城あり郡山
大髭に剃刀の飛ぶさむさかな
苗代の水にちりうくさくらかな

落雁の声のかさなる夜寒かな
御命講や頭のをき新比丘尼
春慶の膳据糸渡す花見かな
新藁の屋根の雫や初しぐれ
ほととぎす勢田は鰻の自慢かな
聖霊となりて越えけり大井川
朝がほのうらを見せけり風の秋
青麥のしばらく曇る淡路哉
けふ限ぎりの春の行衛や帆かけ船
ほととぎす勢田は鰻の自慢かな
かけ橋のあぶなげもなし蟬の声
篠ためて雀弓はる笹の雪

寒菊の隣もありやいけ大根 許六

冬さし籠る北窗の煤 翁

月もなき宵から馬をつれて来て 嵐蘭

馬方を待戀つらき井戸の端 洒堂

月夜に髪をあらふ初出し 許六



中央高原

葉雫の隣る青葉へ夏の雨

唐松の空五角六角颱風過ぐ

鹿の道の右は山莊梅雨晴るる

湧水の水沫に隠る岩魚かな

吉弘恭子

杉苔をとり込む根松の太き根

星鴉しづかに椴をとびたちぬ

黒鶇おほきく鳴きて遠ざかる

白樺や風のはやさに夏の霧

米杵をとびこし遙か星鴉

日の差して池底の草のいろとりどり

梅雨晴や岸边にとどくボートの輪

かつこうのこゑの透りし山を後

『毀誉褒貶』

定梶 じょう

むかし次のような戯れ歌をきいたことがあります。

本所元町糸やのむすめ

妹と十八姉はたち

諸国諸大名は弓矢で殺す

糸やのむすめは目でころす

これを咀嚼すれば句づくりに利用できる、と気づいたことが先月号の文章になったわけで、私自身随分

長く起承転結の法にお世話になっていのです。但し、だからいい句ができる、という保証になり得ないのは私が証明しているわけですが。

俳句に関わらず文芸一般、発表されたら読み手まかせ、その評価には読み手各人の主観が加わることになる。ことに主観は俳句の敵であるかの如き言い方をずっと過去いわれてきてはいますが、作り手も読む方も体験、経験にバックアップされた主観でしか理解の手段を持ち得ないのが本当ではないでしょうか。

去年今年貫く棒の如きもの

高浜 虚子

これほど主観的な句はありませんまい。この主観に大勢の方が共感を持ちうるからこそ天下の名句になっているのです。主観と独善は違うということです。

その虚子

鶏頭の十四五本もありぬべし 正岡 子規

を絶対認めなかった。最も親炙した虚子ですからちゃんとした理由があつてのこと。要するに文芸一般、百人が百人認めるものに真にいいものがない、ということではないでしょうか。ことに俳句のような短い詩ではその傾向が大きい。毀誉褒貶は詩についてまわるもの、はなはだしきは

あたゝかき十一月もすみにけり 中村草田男

を季重なりとする方もあるそうで、なんとも馬鹿らしいと思うのですが、それが現実です。鶏頭の句を虚子が認めなかった理由については不明ですが、佳句と認めている方もたくさんいらっしゃる。資料がありませんので記憶に頼るしかないのですが、議論の的はほぼ「十四五本」の数字にあつたようです。詩歌の鑑賞必ずしも作者の意図を再現するに非ず、

という言葉を盾にとれば、重要なのは「ありぬべし。」です。授業文法ふうになって申しわけないのですが説明しますと、完了の助動詞「ぬ」に「べし」がくつつきますと、「きつと……だろう」と訳すべきと教わります。鶏頭が十四五本もきつとあるにちがいないと作者は想像しているのです。本当は十本だつていいのです。眼前にみえていないという処が大切なのです。いずれに組するにしろ、毀誉褒貶は名句の条件。そこに俳句のおもしろさと複雑さがあり、かつ俳句盛況の原因もあると思うのです。

さて、その「ホトトギス」の本年九月号の巻頭句の一句に「春潮に地震の昂り残る能登」藤浦昭代があるそうです。作者は「ホトトギス」衛星誌の一つの主筆者。地震の被害を受けたお弟子さん達を見舞った折の一句、とあります。一句のめりはりの無いのはこの結社の特徴のようですから云々するのは遠慮しますが、「地震の昂り」の措辞には驚きました。これが仮りに、「大きな揺れだつたねえ」、「ああびつ

くりした」で終わった地震なら正に「昂り」でよろしいのです。現実には死なれた方が一名であったのは奇跡としか言いようのない被害が出ているのです。その地を見舞われて「私は興奮しました」に等しい言いようでおっしゃっている。文芸に携る者として不用意に過ぎると思うのですが、それさえも巻頭に選ばうという選者がいらつしやる。いよいよ毀誉褒貶は句につきもの、ということでしょうか。

○七年九月号を以て終刊した『俳句研究』誌に「六〇〇からのメッセージ」の副題で自選代表句・他作感銘句等の句文を掲載しています。自作代表句はともかく、他作感銘句には相当かさなつて句が挙げられると予想していましたが、なかなかどうして、多彩というも愚かなり、の状態。これだけ多くの俳句作家がいてそれぞれが感銘句を挙げるとなれば、毀誉褒貶のバイがそれだけ多くなるわけですから当然といえば当然。「いま、俳句に思うこと」なる各人の短文にしても、言葉の乱れを嘆く人、季語

の本意を失うなど主張する人などなど、随分昔から言われていることをやっぱり今でも言い続けたい人が大勢いらつしやるのです。結局加藤あい沙さんの「あたりまえの中にある不思議を俳句に」というメッセージが一同の考えを代表しているのではないのでしょうか。私が数ヶ月つづつてきた文語のことにしても、確実に廃れてきている。いま手元にある昭和四〇年代の総合俳誌にはことばの揺れ（国語学者はことばの「乱れ」とはまず言いません）を反映した遣い方はあつても言葉遣いのまちがいはありません。現代、その揺れは動詞では二段活用の終止・連体・已然形に如実に表れていること既述のとおりです。このことは先程のメッセージの中で中村菊一郎さんも確実に述べられています。理解のできていない方なからいのです。無理解に遣うことばが揺れやがて変化する、それがことばの歴史でしょう。

雲流るる方へながれて春の鴨

友岡 子郷

きちんとした方だから「雲流る。」と連体形をつかった。そうじゃなかったら「雲流る方へ」としたかもしれない。あるいは

菜の花や妻にしなければ耳冷ゆる
滝落ちてずつと離れて濡れる石
田中 裕明

初句は文語。次句は誤植でないなら口語です。「ずつと」という口語調があるための「濡れる」だと理解できれば、実に適した遣い方だと。今後はこんな風な遣い方が普通になっていく予感がします。「旧仮名遣い」と「新かな使い」についてはまた別の機会があれば述べさせていただきますが、何しろ「口語俳句」は難しいのです。当分は旧仮名遣いでいくより他ないという方が私の他にもきつといらっしやる筈。



金井充ご夫妻と幸手の権現堂堤を漫ろありきしてゐるときに、烏貝のはなしを聞いた。権現堂堤は中川の堤防上約1kmにわたつて、約千本の桜並木が続くとときく。春はさぞかしみごとなものであらう。その堤が或年の台風で決壊した。「切れ跡」と称して遺つてゐる。

権現堂堤切れ跡曼珠沙華

瀧 春一

切れ跡で子供の頃兄弟とよく鰻を捕つたさうだ。この鰻の方言をきいたのだが、メモをしなかつたら全く頭の中から消えてしまつてゐる。その流れには烏貝や田螺も居たといふ。烏貝のことを「カッタケ」とよんでいたとか。田螺は食べたが、烏貝は食べたことはなかつたらしい。烏貝の大きさを訊くと指で輪を作り教へてくれた。辞書によれば烏貝は二〇センチ程になるとか書かれて

母はと問う烏貝とぞ答えける

和田魚里

『機』より 佐藤喜孝

いる。充さんが作られた大きさは、鶏卵を一、二回り大きくした楕円であつた。育つものは二〇センチくらいになるのであらうが、大方は充さんが示した輪の大きさ位なのだらう。私が烏貝の大きさに拘つてゐるのをみて、天界の和田魚里は、馬鹿だなあと齒のない口を開けて呵々大笑されてゐることだらう。と思ふとなほこの句が愛ほしくなつてきた。『未定』68号に「大正時代、虚子ら『ホトトギス』の面々は、月並俳句の特徴を駄洒落・穿ち・謎・理知的・教訓的・嫌味・小伶俐・風流がる・小主観・擬人法にあるとしたが、はたしてこれらの技法は、俳句形式にとつて不要なものであらうか。」(西口昌伸)とある。掲句も立派な月並、私もぬけぬけとこんな句を作りたいものだ。

あをかき集

秋霖
地虫鳴く
表

堀内一郎 選
(六人目以降五十音順)

秋霖や大往生といふ安堵
秋霖や彼方へ声を張つてみし
秋霖や雫の残る車椅子
秋霖をたつぷりふくみ晴れあがる
表から弔ふ人と秋の蝶
携帯電話うんともすんともせぬ秋霖

吉弘恭子



吉弘恭子

「秋霖や」は悲しみ。「大往生」はせめてもの救いである。最近、八十七と九十三歳の知人が亡くなったが、同年の仲間は既に見ない。身内と子供の会社の友人達が大勢齊場に、大往生には故人の淋しさが隠れている。「秋の蝶」は化身を感じ怪しさも漂う。

秋霖の妻の小さし物干しに
渡邊友七

秋霖や岩郡水ををどらしめ
野の墓標秋霖に置き母郷去る
墓幾つ岩に還れり地虫鳴く
地虫鳴く背曲げ何に怯ゆるや
蟬の森透きて瞼ぞ裏表

秋霖や手作り山莊軒完成
東 亜 美

秋霖に取りあげられし庭仕事
秋霖の蛇行してゆく山の道
秋霖や信濃には山無きごとく
小心は父親譲り地虫鳴く
地虫鳴く御礼詣りはまだゆかず
祖父の家蚯蚓鳴くこと昔より

定梶じょう

秋霖や尾根の一本松にふる
さやけくて視力表なるためしてみる
水番の割当表よ壁に古る

渡邊友七

秋霖の突き放しが一層、妻への愛情を深く感じとれる。「野の墓標」に立ち去り難き念が見え、「岩に還れり」と切り返すが地虫が心中を語る。

東 亜 美

秋霖やと暗くして、山莊軒完成の喜びは効果。取りあげられし、山無きごとくの変わり身に妙味を見せる。小心は謙遜で「親に似ぬ子は鬼つ子」中々の作。

定梶じょう

蚯蚓鳴くに昔の佇いと郷愁が伝わる。一本松も水番の割当表も思い出を彷彿させるし、出生地への作者の魂の傾斜は強烈である。×の自乗と難間を示してご満悦の螻蛄の声。益々怖いお方に。兼題は「地虫鳴く」ですが、『十七季』に「秋の夜、庭にジーツと鳴く声を古人は蚯蚓

計は突と秋霖松の溜濡らす
xの自乗とyと蝮姑の声
ひつたくり多き坂道地虫鳴く

篠田純子

秋霖や空也の像のひすい
秋霖や片目とちもう片目閉づ
秋霖や付箋の約束滲み出す
地虫鳴くサービスタイムのラブホテル
秋霖のひと日を夫に凭りゐたり
秋霖の茶会待合猫の占む
小夜更けし川越街道地虫鳴く
突然の辞意の表明桐一葉
秋曇 鮎 鱒 の 裏 表
表情にゆとり戻りぬ 罽 雲
空白の今叫びたし地虫鳴く
残業の支払ひせまる地虫鳴く
口べたの表情堅く地虫鳴く

安部里子

の鳴く声と言い慣わしてきたが、実際には蝮姑の声。」とあるので兼題の副題としていただいた。

篠田純子

秋霖の危さ曖昧さは現世に通じ、空也像の澄んだ眼光は作者の思いに外ならない。片目のさりげない諧も微笑ましく、ホテル・夫に凭り兎に角仲良し。作者に煌めくもの、多感のなせる技か。

赤座典子

桐一葉が天下の秋を告げた。最近の社会情勢を見事に言い止めた。裏表が秋曇を強調し、硬さの中に可笑し味もそこはかとなくこぼれる。

安部里子

空白はスランブであろう。叫べば消えるものでもなく個々に悩みはつきもの。

秋霖や表座敷の閉めたまま
秋霖の表情変る水かさや
教会のゴスベル響き地虫鳴く

遠藤 実

秋霖や母なる関東ローム層
隠蔽す人種問題地虫鳴く
剥落の城壁長し地虫鳴く
太石に微熱のありや地虫鳴く
秋霖や大屋根に鳩身じろがず
秋霖やゆつくり曲る都電かな
木と紙の家を好むや地虫鳴く
ステレオの止まりて地虫鳴き初む
表札に子の名書き込み秋うらら
表替して新涼の夕ごち
秋霖や午後休診を知らず来て
秋霖や白樺の白浮きたたす
地虫鳴く喜怒哀楽の分ちなく

木村茂登子

鎌倉喜久恵

残業の支払いに景気を意識させ深刻さを覚える。うちの会社数年残業代ゼロ。

遠藤 実

ゴスベル・地虫鳴く共に素朴さと命を感じる。最近生命の崇高さに欠けた現象、報道にしても忌わしい事件が続出、毎日が暗い。この作世への警鐘である。

鎌倉喜久恵

「秋霖や」にスピード時代に遠い良い風景を思い浮かべる。作者の心の癒しであるうし、第三者を誘いこむ。表札に子への信頼感が滲み母子愛に思わす。

木村茂登子

表替して、日本人ならではの風情である。残念だが町から畳屋が消え、屋敷がビルになってゆく。夕ごちもやがて死語に、哀楽は限られた一生、地虫は永遠。

孤愁味はふべしと地虫鳴く
表立ちて何も言へずに酔芙蓉
古びたる表札の文字暮の秋
芝 尚子

表沙汰避けてひそやか萩の道
秋霖や近頃顔を見せぬ猫
寝ねがてをなぐさむるかに地虫鳴く
奉納の表記達筆秋祭

芝宮須磨子

予定表粗方こなし九月尽
秋霖の街ふとよみがへる母のこと
秋霖やこもりてひと日書類とぢ
ひとり居や思ひあれこれ地虫鳴く
秋霖や蜘蛛の巣きらり現れり
須賀敏子

秋霖やインターネットで小旅行
山粧ふ去年と違ふ表見せ
ふるさとの表座敷で秋彼岸
九回の表で終はる子規忌かな

芝 尚子

何れにも慎ましい作者の日常が描かれ
それが運命のリズムに乗ってゆく、だか
ら俳句は命と先達は言う。ボールペンも
使い捨て時代だが、昔者は捨てられぬ。

芝宮須磨子

投稿の表記達筆、祭りが来ると町内
には必ず書き手が居るもので、神酒所に
高々と掲げ提燈を吊ると華やいでゆく。
この作、地味だがふくらみがある。

須賀敏子

蜘蛛の巣も珍しい、昔は守宮も蝙蝠も
いたのに、きらり現れりに吉兆の期待も
感じられる。野球名付け親の子規居士に
何んと九回の表とは嬉しいねエー。

鈴木多枝子

八月十五日は日本の命運を決めた日。
水撒きの所作、大事な日と平穏な日常

鈴木多枝子

八月十五日ホースで表に水を撒き
表から裏に抜け出る夏の風
くぐり戸の低き表の秋旅籠
秋霖に紛れず五時のチャイム鳴り
秋霖に逝くテノール歌手の太き咽
秋霖に荒れきし庭の石灯籠

田中藤穂

寺町のしづもり早し地虫鳴く
地虫鳴くまだ抜け切らぬ夏の風邪
地虫鳴く復興おそき災害地
秋めくや備後表のふみごこち
秋霖にぼつと色づく花ありき

長崎桂子

大雨にぬかるむ小道地虫鳴く
ブルドーザー終日動きに地虫鳴く
透間なくアスファルト敷き地虫鳴く
裏表なき挨拶や秋日和
秋霖や小屋の奥より山羊の声

早崎泰江

が重なる。改めて考えさせられる作。旅籠は未だ地方に貴重な存在で愛される。

田中藤穂

作者は静かな処に住むようだ。石灯籠に閑雅な生活を感じ、備後表の踏心地の季節感作者ならではのもの。囿り知れぬ境地を想像、私など思わず吐息。

長崎桂子

色づく花に安堵感がながれる。繊細な心情が読者に潤いを与える。俳句は種々言わずとも、これで良いようだ。ブルドーザー、アスファルトは大地を奪う。

早崎泰江

山羊の声、こおろぎは自身への泰らぎ。仮面は不気味だし、人形無表情・眠れぬしじまは不安そのものだ。このように自分を表白しながら皆年を越すのである。

秋霖や日本最古の木の仮面

こぼろぎの自己表現の闇ならむ
秋の雨喋る人形無表情

地虫鳴く眠れぬしじま広がりぬ

秋霖やびたりと閉まる表門

秋霖や聞き役となる車椅子

秋霖や朱色の滲む幟旗

地虫鳴く茶室に続く広廊下

雑草を引けば何処かで地虫鳴く

秋霖や統合等合近き小学校

秋霖や釘打つ音に靴屋さん

秋霖や祖母の羽織をお手玉に

地虫鳴く下水道地下鉄地下高速道

秋刀魚焼く表と裏と生じをり

径まよひ表通りを探す秋

小鳥鳴く表玄関ふるさとに

森山のりこ

森 理和

吉成美代子

森山のりこ

名園など午後4時閉園5時退場を知らせる。びたりで内奥が想像され秋霖と瞬間は目に残り。茶室が一番落つきを見せて読者を良い気分させる。

森 理和

何処かで聞こえて来た釘の音も幻になつたようだ。釘打つ靴屋は町に貴重な存在で一徹を通す古老。お手玉は祖母が若き日の縮緬の花柄、懐かしいねエー。

吉成美代子

径まよひ、新宿に住んでも周りも変わる。影のなくなるのは淋しい。薔薇散華は人の命にも通じ出色の出来栄えと思う。

秋彼岸表の門に鳩群れて
山の駅電車待つ間の地虫鳴く
秋霖やはらはらと散る薔薇の花
秋霖やてのひらかわいてをりにけり
地虫鳴く終着驛のひとつ前
秋霖やつばめかへりし文書館
店先に摘まるる句集地虫鳴く
サイレンが表通りでやむ良夜
秋霖や赤ちようちは暮れ六つに
地虫鳴く振り子時計は右ひだり
表替へ父母以後は冬支度

佐藤喜孝

竹内弘子

堀内一郎



あを吟行会のお知らせ

吟行地 上野動物園

日時 1月20日(日) 午前11時

集合場所 象舎の前

交通 JR「上野」徒歩五分

会場・句会場 未定

十一月に在来種の木曾馬とトカラ馬が来園。干支にちなんで江戸時代から日本で飼われていたという「ジャバニーズマウス」も見られます。

幹事 佐藤喜孝 090 9828 4244

十月の句会

傳 中野区 カフェ傳

満月や息を弾ませ句会場
 秋桜白亜の館の扉口まで
 地図帖に書き込みあまた天高し
 秋の蝶ゆつくり蜜を吸ふ日差
 日向くさき子どものあたま彼岸花
 苦瓜のそここ覗くしゃくれ顔
 秋蝶を抓めばかさといひにけり
 隧道の入口朝顔の弾け
 一棹にて真孤の花をくぐりけり

栗飯のぬくもり輪っば香りけり
 ふところに秋風はらみ畦を刈る
 転任の教師も居りし秋祭
 輪読の眼鏡拭きをり秋の昼
 屋ちちろ池のほとりの草の風
 秋風に水輪をひろげ鯉の群
 マイムマイムひらいてちちむ踊の輪

理和
 茂登子
 藤穂
 綾子
 弘子
 典子
 喜孝
 恭子
 敦子

弘子
 泰江
 綾子
 慶子
 藤穂
 友七
 敦子

あを林檎

白金白福社会館

自転車の前後に子乗せ秋の蝶
 くわんおんのかひなのなかき月夜かな
 秋風にからまれてゆく一輪車
 門前の石段に罽秋の風
 身ほとりに猫の寝息や秋の夜
 シスター一人乗り込んでくる秋の蝶
 窓ごとに秋の顔ある遊覧船

東亜末
 喜孝
 泰江
 藤穂
 恭子
 純子
 弘子

七座

中野区 小川苑

十三夜箸を洗ひてもどしけり
 のつけからゆれるつもりの芒かな
 行く先をふと思ひ出す秋の蝶
 読み止しの頁に眼鏡栗名月
 浅草橋行き来忙しき秋の暮
 少年の鏡に笑みし十三夜
 掻き分けて銀杏拾ふ箸の先
 満月の箸墓古墳何か動く
 白根山ガスがかかり来草もみぢ
 声のして箸墓古墳秋の暮

喜孝
 木枯
 東亜末
 理和
 須磨子
 恭子
 尚子
 藤穂
 多枝子
 夏子

連句勉強会 毎月第1日曜

中野坂上 佐藤喜孝 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森理和 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜

岸町公民館 竹内弘子 (0488-86-3501)

あを吟行会 一月第3日曜

上野動物園 佐藤喜孝 (090-9828-4244)

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子 (090-9839-3943)



先月まで山田梅枝さんのご厚意により「正平篆刻」の世界を鑑賞させていただきました。ありがとうございまして。今号から自筆になる俳句を紹介します。鷺尾雨工著「元禄義挙の翌日」に今月の句の由来がでてゐたのでその件を

すでに吉良邸裏門で大高源五は、素懐を遂げた悦ばしさを吟じていた。

日の恩や忽ち推く厚氷

それに和したのが富森助右衛門、仙石邸へ行つて泉岳寺にはまだ戻らぬが、吉良邸裏門での即吟は、

飛び込んで手にもたまらぬ霰哉

というのであつた。そこで子葉の俳号を持つ大高が、再び、

山を抜く力も折れて松の雪

春帆の俳名を有する富森もまた、

寒鳥の身はむしらるゝ行衛かな

生死の間に談笑すると能く曰う。だが曰うは易くして、行うは難しい。



「山を抜く」は山を突抜く程の力といふ謂であるらしい。

先月の「あをかき集」兼題に「原爆の日」を出題したのは私。一郎氏が評文の中で「原爆忌で通じるか」「原爆の日

が出題なので忠実であるべき。」と書いていただいた。机上にある数冊の歳時記には「原爆忌 原爆の日 平和祭 爆心地」(現代俳句協会)「原爆忌 広島忌 長崎忌」(角川文庫版。平和祭・爆心地が季語と知り驚いた。原爆を投下された日を季語として如何に表すか工夫の末の「原爆忌」であり「広島忌」であらうと思ふ。が、忌を調べると、死者の命日に使はれるのが一般的。「芭蕉忌」然りである。広義に解釈して素直に読むと「原爆忌」は原爆の無くなった日となるのではないだろうか。といふことで「原爆の日」と出題した次第。「広島忌」「長崎忌」はいやな言葉である。原爆忌に対する私の誤読が誤読でなくなる日がかくれば是非使いたい。(喜孝)

二〇〇七年十二月号

発行日

十二月十五日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090-99828-4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝

竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

郵便振替

会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年

00130-6-555526 (あを発行所)

表紙・佐藤喜孝
乱丁・落丁お取替えます。